

どくとくのひろば

No.
39

こころのひろば

人が自然と共生する世界を
つくるために

[塚本 こなみ] 2

特別寄稿

自分なんか大したことが
ありません、の国で

[細川 貂々] 6

見てわかる！ 道徳

「家族愛、家庭生活の充実」

「善悪の判断、自律、
自由と責任」(小学校)

「自主、自律、自由と責任」
(中学校)

[越智 貢、奥田 秀巳、上村 崇] 8

実践事例【小学校6年】

法やきまりを守ることの大切さを
考える授業

[納 由理、島 恒生] 10

こんなコト、聞いてみました！

道徳科の授業に苦手意識を感じる
先生がいたら、学校としてどんな
取り組みをすればいいですか？

[友延 倫子] 14

地球の仲間からのメッセージ

ハトとフラミンゴの子育て戦略

[長瀬 健二郎] 15



日文的Webサイト

日文 🔍



こころのひろば



つがもと
塚本 こなみ

Profile

樹木医、公益財団法人浜松市
花みどり振興財団理事長

家業の造園業の手伝いをきっかけにその世界に飛び込む。一級造園施工管理技士、日本初の女性樹木医。1996年、あしががフラワーパークの大藤移植を成功させ、一躍注目を集める。現在、全国各地にある樹木の治療や移植のほかに、はままつフラワーパークの運営に携わっている。

人が自然と共生する世界をつくるために

関連する SDGs 目標



樹木医の塚本こなみさんに、樹木医の仕事や園芸福祉^{*1}に取り組むようになったきっかけ、そして気候変動が自然に及ぼす影響などについて、お話を伺いました。

これまで樹木医として精力的に活動されてきましたが、その原動力は何でしょうか？

自分の人生と仕事を振り返ると、「この木を守ってほしい。」「こういう庭や公園を作ってほしい。」という依頼主の思いに応えたいという気持ちが人一倍強いのかもかもしれません。

あしががフラワーパークの大藤移植の場合、依頼主は4年もの間、何十社と相談しても引き受け手がおらず、本当にせっぱ詰まり困り果てて私に連絡をくれ

た。そういった人を放っておけないだけ。その思いに応えたいんですね。

移植は無理だと言われたなかで、塚本さんだけが大丈夫だと思ったのは、どうしてでしょうか？

大藤を見たときに、生命力の強さやエネルギーをすごく感じたんですね。弱っている人が手術をする場合、ある程度、体力を回復させてから手術するじゃないですか。だから、体力がある木を移植する場合、できる限りのことをすれば、基本的に移植できるんです。

^{*1} 園芸活動を通して、社会的弱者に対し、支援を行うこと。



大藤をめあてに多くの来園者でにぎわう、あしががフラワーパーク（栃木県足利市）提供：時事通信フォト

大藤の移植を引き受けた後に文献で調べると、藤の移植ができるのは幹の直径が60cmまでと書かれていました。この大藤は直径1mあるので、引き受け手がなかった。ただ、その文献は昔に書かれたものだったんです。今はトレーラーやクレーン、ショベルカーもある。だから、やり次第で移植できると思い、引き受けました。やらないうちから考えもせず、工夫もしないで、駄目だと決めつけたら何もできない。やらないと分からないことってたくさんありますから。

木の治療や移植をするときは、どこを見て木の状態を把握するのでしょうか？

まず、葉の大きさや量、枯れ枝や腐食がないか、虫がいらないか、根が健全に育つための土壌かを調べます。

次に木の周りの環境を調べます。例えば、ある県にある大木が弱っているから見てほしいと依頼があり調べると、かつてその木の周辺は田んぼで、水が必要な春から初夏にかけてふんだんに水を得られていたんですね。しかし、田んぼが全てなくなって住宅地になり、木は雨水などの僅かな水しか得られなくなってしまい、弱ってしまったことが分かりました。

理由が分からないと治療や移植はできません。だから、経験と観察力でその理由を徹底的に調べます。

塚本さんが「樹木医は木を救うというよりは木に宿る生命力を高める手伝いをしているにすぎない。」と思うようになったのは、なぜでしょうか？

ある寺にある、樹齢1300年、高さ50m、幹回り

13mの木を初めて見たときに「神様がここにいる。」と思いました。毎年、その木に会いに行くようになって、「この枝が枯れているから、切ったほうがいいのかな。」とか「私がこの木にできることは何だろう。」と想像するようになりました。そのとき、「この木は何かしてほしいんだらうか。」と思って。枝が枯れるのは、太陽の光に当たらなかったからで、これは自然現象です。枯れた枝はいずれ傷つき腐っていく。その後、ポキッと折れて地上に落ち、微生物に分解されて土にかえっていく。

そういった自然の営みを想像すると、私がやっていることは木が望んでいないことなのかもしれないと。

「あなたがもし枯れそうになったら、私は何をしておあげたらいいの。」ってその木に聞くと、「何もしなくていいよ。」って言うんです。

あるがままでいいんですね。

そう、自然のままですよ。外科的な治療よりも、この木が弱った原因を探ってその原因を取り除いてあげる。この仕事は、木の生きる力をほんの少しお手伝いしてあげるだけだと考えるようになりました。それに木の気持ちを分かってあげられるのは樹木医しかいないですから。

人間の知恵なんて微々たるもの。自然の営みから見れば、私がこの木を助けようなんておこがましいと思うようになりました。

それでもやるのは、樹木医として依頼主の思いに応えたいからです。



はままつフラワーパーク（静岡県浜松市）の桜とチューリップの庭園（左）、スマイルガーデン（右） 提供：はままつフラワーパーク

園芸福祉の取り組みをしているそうですが、なぜ始めようと思われたのでしょうか？

私があしかがフラワーパークの園長をしていたときに、不登校や引きこもりだった2人を受け入れたことがきっかけです。

不登校だった子には花を植えたり、水をまいたり、花がらを摘んだりする仕事をしてもらいました。働きだした頃は下を向いて、口数も少なく笑顔もなくて。

春になると、フラワーパークにお客様がたくさんいらっしゃるじゃないですか。そうすると、お客様が「きれいね。すごいね。」って言ってくださる。なかには、頑張っている職員たちに「こんなにきれいな花をいっぱい咲かせて、私たちに見せてくれてありがとう。」と言ってくださるお客様もいるんですよ。これって、働く私たちにとって、ご褒美なんですね。本当にうれしいことなんです。

その子は、働きだして数か月たった頃には笑顔で働くようになりました。心が回復したんでしょうね。

引きこもりだった青年は、藤の担当に。最初は表情が暗くて。先輩や同僚たちから指示されて藤の手入れをするわけですよ。指示されてやったのですが、藤の花が見頃を迎えると、たくさんのお客様から「きれいね、すてきね。」と言ってもらえる。どれだけ達成感があったことか。

働きだした頃は、お客様からの藤の栽培に関する質問に答えられなかったその子も最後には答えられるようになりました。

私は彼らの面倒を特別に見ていたわけではありません。でも、お預かりして彼らを見ていると、植物の仕事は心が苦しくなっている人たちの心の慰めになるかもしれないと思うようになりました。

その後運営に携わった、はままつフラワーパークでは、校外まなびの教室*2「くろーば一教室」を開かれましたね。

はままつフラワーパークに携わった頃、発達障がいの子をもつ知り合いの親御さんが、子どもと一緒にフラワーパークで手伝いをさせてほしいとおっしゃって。その子がとてもいい表情で掃除や草取りをしている姿を見て、ここに不登校の子どもたちが通う教室を作ろうと思ったんです。すぐに施設の改修を進めて、ようやく5年後に教室を開くことができました。

この教室の特色である「花育」の活動では、子どもたちがフラワーパークの職員に教わりながら、いろいろな植物に関わります。パーク内に梅園があるので、梅の実を収穫して梅のジュースを作ったり、伐採した木を使ってしいたけの菌打ち体験をしたりもします。昼休みには、子どもたちのにぎやかな声が聞こえてきます。

修了式に「このフラワーパークでの楽しかった思い出を話してください。」と言うと、「『花育』の授業がいちばん楽しかった。」とか、「自分で植えた花がこんなにきれいに咲くとは思わなかった。」とか。なかには、「大人になったら働かせてほしい。」という子もいますね。

植物や樹木に触れたり、育てたりすることには、心の回復につながる力があるのでしょうか？

はままつフラワーパークで花がきれいに咲けば、お客様がたくさん来てくださるじゃないですか。お客様は、きれいな花を見て季節を感じたり、植物に癒やされたりしたくて来るわけです。

この場所で心の苦しい子どもたちが植物を育てることで、私流の言葉で言うと「人間性復元力」なんです。自分の心を取り戻して回復できると思うんです。植物のもつ力を通して、子どもたちがほんの少しでも幸せになったらいいなと願っています。

近年、記録的な猛暑が続いています。自然環境にも、その影響はあるのでしょうか？

もちろんあります。植物や樹木の高温障害が増えていて、花つきが悪くなったり、病気になるやすくなったりする影響が出ています。

藤の花は、4月の終わり頃に咲きますが、花芽（発達すると花になる芽）はいつ頃できると思いますか？

翌年の1月ぐらいですか？

いいえ、1月だと藤は休眠しています。藤の花芽は、花が咲き終わった後の6月ぐらいからできるんです。花芽の大きさは小豆大ぐらい。長藤だと、1つの花房に花芽が200ぐらいあるんですよ。

ところが、藤の花芽って、35度以上の日が2週間ほど続くと暑さで花芽の中が蒸れるんです。

8月の終わりに花芽を割ってみると、高温障害で中身が蒸れて茶色くなり、枯れていることがあります。

17、8年前から、平等院にある藤の栽培指導していますが、10年ぐらい前から花が咲かなくなりました。3年間ぐらい通常通りのやり方で栽培しても、秋になると花芽が枯れて花が咲きませんでした。

最初、その理由が分からなかったのですが、「ああ、これは高温障害だ。」と思って。それで夏の間、藤棚にミスト発生装置を設置してもらいました。水を霧状にして散布することで、藤棚周辺の気温を下げる効果があるんです。それで翌年から花が咲くようになりました。

高温障害の影響は深刻なんですね。

はい。近年、植物や樹木以外でも高温障害が出ています。水産物の場合だと、温暖化の影響などで海洋環境が変化し、カツオなどの漁獲量が減少しているとい

うニュースがありました。

それと同じように、植物や樹木の分布の北限・南限が変化するという影響が出ています。

魚や植物、人間も長い年月をかけて進化してきたわけですが、その進化が今の地球環境に追いついていない、そんな気がしています。

気候変動について、私たちが考えなければいけないことや取り組むべきことは何だとお考えでしょうか。

私たちは、人間が健全に生きていく仕組みを作らないといけないですね。だって、私たちが食べるものって大体が農作物か家畜でしょう。それらがなくなったら、人間は生きていけなくなります。自然があってこそ人間ですから。

地球上で人間だけが特別な存在のような錯覚に陥りがちですが、人間も自然の一部なんですよ。自然を大事にしなかったら、人間は生きていけない。

じゃあ、自動車やエアコン、ガスを使わないのかっていうと、それはなかなか難しい。でも、地球への負荷を減らす取り組みをしなければ、今後、人間が生きていくのが難しくなりますよね。

世界的に取り組まないといけない問題ですね。

今、地球上の人口が多すぎるのかもしれない。だから、全体のバランスから考えれば、環境問題を放置することは、自分たちの首を絞めることになるかと思えます。

私たちは、経済優先で利便性のある生活を享受しています。今を生きる大人として次世代の人たちに、どんな地球を手渡すのか、一人ひとりが考えなければいけません。

私たちは自分本位になりがちですが、地球上でどんな問題が起きているかを把握しながら、自分たちの生活を変えていくことが大事だと思います。答えの見つけにくい問題ですけど、自分にとって何が幸せなのか、便利だから幸せなのかということ、そうでもないですから。

日本文教出版『中学道徳 あすを生きる 1』では、難しいとされた大藤の移植を成功させた樹木医、塚本こなみさんの取り組みを描いた教材「木の声を聞く」を掲載しています。



*2 「校外まなびの教室」は、浜松市内の小・中学校に在籍している学校に行くことが難しい子どもたちのための教室です。

自分なんか 大したことはありません、 の国で

特別寄稿

漫画家・イラストレーター
細川 貂々

私はこの国で50年以上を生きてきました。立派な大人です。親に育てられ、学校に行き、社会に出てまれ、いつしか自分がこれと思ったことを仕事にして、今ではこんなところに文章を書いています。何か偉そうです。自分の子どもも1人育てています。いい親である自信はありません。子どもを通じて、学校現場に関わりました。子どもたちの親にも関わりました。先生たちの姿も見ました。

そうして感じたことは、私が子どもだった頃と、ほとんど何も変わっていないということです。たしかに、遊び場が減ったとか、塾に行く子が増えたとか、そういうところは変わりました。情報通信の機器が生活に入り込んできたことも。子どもたちからゲームやネット動画をどう取り上げるかが今の親にとっての課題です。ん？ 私たちが子どもの頃は漫画やテレビだったな。そう思うと、その辺もあまり変わっていないのかもしれない。

私が子どもだった頃、親や先生に叩き込まれたことは「出る杭は打たれる」ということです。得意なことを得意そうにしてはいけない。不得意なことを頑張っ

て、もしうっかり褒められたら「いやそんな、大したことないです。まだまだです。もっと頑張ります。」と言わなきゃならないと。そう言っていれば「謙虚でよい。」と、うっかり目立ってしまったことをチャラにもらえる知恵でした。うっかり目立つことについて、親や先生はむき出しの悪意はぶつけませんが、常識として謙虚さを求めてきます。得意げにしようとして、評価を下げられたり、叱られたり……。子ども同士はもっと露骨。目立ったり、得意なことがある子に対してはあの手この手で引きずり下ろすことをやっています。私も他人に対してそういうことをやったかもしれません。

私が子どもだった頃というのは40年も前のことです。あれから40年たったんです。子どもたちや学校現場は、子どもを育てている親たちは、変わりましたか？ 変わってませんよねえ。だって大人が変わっていないもの。「いじめはいけない。」と大人たちは言いますが、LINEをするとお母さんたちが率先していじめみたいなことをやっています。1人の目立った人がいると、その人を抜いたグループLINEがつくられて、目立っていた人の悪口を言いまくっている。先生たちも似たようなものです。

偉そうな大人たちは言います。「この国の子どもたちは諸外国に比べて自己肯定感が低い。それは問題

だ。なんとか自己肯定感を高める工夫はないものか。」と。

自己肯定感が低いかどうか以前の問題として、自己肯定することが認められにくい社会なんです。得意なことがあって、自分は幸せだよ、と言ったら周囲から浮いてしまうし、どんな被害を受けるかわかりません。「自分なんか大したことないです。」と言うのが最適解。大人たちがそうしているのを子どもたちも見ています。

大人たちは言います。得意なことはもうやらなくていい。だってそれは頑張らなくてもできるから。不得意なことを頑張ってやりなさい。できなかったら、それは君が駄目だからだ。そうして「自分なんか大したことないです。」と心の底から言うのを期待しています。

私も、できないことばかりで、へこみながら生きてきました。自分なんか大したことないと思っていました。今でもそう思っています。でも、大人たちの言うことなんか真に受けず、自分が自分の主人公なんだということによりやく気づきました。どんなに、周りの人のほうがすごくて、自分なんか大したことないと思ったとしても、自分の主人公は自分なんです。ほかの偉そうな人や、すごい人に見える人も、私にとってはみんな脇役。

この国では、他人が私をどう見ているか、ということに気がしながら生きることが求められているように思えます。今の子どもたちも同じ。だから自分のキャラとか、序列のことをとても気にしています。でも実は、それも自分の心の中で勝手に想像しているものにすぎません。どうしても自分が主役に思えない、というときもあるかもしれない。でも、四六時中、自分が自分であること。それが自分が主人公である証しなんです。

私って、ルックスもさえないし、やってることもとんちんかんで、ずれたことばかりしているなと思っていても、そんな自分がいちばんすごいし、自分の生き様って最高なんです。おしゃれでかっこいい。天才かもしれない。でも、この国ではそう思っても、それをあんまり周りに言っちゃ駄目なんですよ……。



細川 貂々 (ほそかわてん)



1969年生まれ。兵庫県宝塚市在住。セツ・モードセミナー卒業後、漫画家・イラストレーター、子どもの本の作家として活動中。

2006年刊行のパートナーのうつ病闘病を描いた『ツレがうつになりまして。』(幻冬舎)はベストセラーになり、ドラマ化や映画化された。

著書に水島広子氏との共著『それでいい。自分を認めてラクになる対人関係入門』(創元社)、『生きづらいでしたか？ 私の苦労と付き合う当事者研究入門』(平凡社)、『がっこうのてんこちゃん』(福音館書店)、『凸凹あるかな？ わたし、発達障害と生きてきました』(平凡社)、『どうして死んじゃうんだろう？ いのちの終わりを巡る旅』(晶文社)、『しごとってなんだろう』(講談社)などがある。現在、生きづらさを抱える人たちのための当事者会を開催している。

道徳の学習における応用編です。基本となる22の内容項目は、それぞれ独立しているわけではありません。それらは密接に関わり合い、また競合する場合があります。ここでは、内容項目間の関係を分かりやすく解説し、道徳的価値の本質やおもしろさに迫ります。

監修：広島大学名誉教授 越智 貢
共著：北海道教育大学准教授 奥田 秀巳
福山平成大学教授 上村 崇

今回のテーマ

「家族愛、家庭生活の充実」
「善悪の判断、自律、自由と責任」(小学校)
「自主、自律、自由と責任」(中学校)

「見てわかる！ 道徳」で取り上げる内容項目を募集します！

内容項目間の関係などについて、読者のみなさんが日頃気になっていることがありましたら、編集部までお知らせください。著者と相談のうえ「見てわかる！ 道徳」でそれらの内容項目を取り上げます。上の二次元コードからお気軽にご応募ください！ お待ちしています！！



誰もが人の子

人は誰も、誰かの子どもです。幼い子どもも、子をもつ親も、子ばかりか孫をもつ人であっても、誰かの子であることに変わりはありません。

このように、この世に生を受けるとき、人は誰かと親と子の関係を結びますが、子が生まれる前に親のことを知ることができないのと同じく、親もまたこれから生まれてくる子がどのような子どもであるのかを知ることができません。この点では、血縁関係の有無に関わらず、親と子の関係は常にお互い初顔合わせの出会いにほかなりません。

そのように出会った親子が共同生活を営む中で、いつも仲むつまじく過ごすことができるとは限りません。むしろ、意見の相違から衝突することもあれば、時には自らの親や子に対して憎しみに近い感情を抱くことさえあるかもしれません。とすれば、親子関係は、愛憎入り混じった、とてもやっかいな関係だと言うべきでしょう。

今回のテーマは、この親子関係です。

「子は親を映す鏡」

親が子の成長に責任を負っていることは、誰もが自覚していることでしょう。人間の子どもは他の哺乳類とは異なり未成熟の状態生まれ、長い期間、援助を必要とする存在です。親や保護者といった大人の関わりなしに子どもが健全な成長をすることは不可能です。

だからこそ、「子は親を映す鏡」と言われるように、よくも悪くも、子どもは親の強い影響のもとに育ちます。家庭生活の中で、子どもは親から注意やしつけを受けて規範や善悪の判断を学ぶだけではありません。むしろ、子どものごっこ遊びの様子からも分かるように、親の振る舞いを見て、それを模倣することで、社会の常識や規範を学ぶことが少なくないのです。

子どもが親を育てる

しかし、どのような親も子どもにとって常に見本となるような、自律的な振る舞いのできる完璧な大人であるわけではありません。むしろ、親も弱さをもつ

た一人の人間です。欲望や衝動に流されず、他律的な振る舞いなど決してしないと言い切れる親がどれほどいるのでしょうか。

しかし、小さな子どもがいれば事情は異なります。親の振る舞いを見つめるわが子の目線を感じるとき、親は自分の振る舞いを見つめ直すことができるからです。日頃からズルをしてはいけないと子どもに教えている親が子どもの前でズルをすることはできそうもありません。そればかりか、自分一人では頑張れなくても、子どもを育てるために自分が頑張らねばならぬと、責任感を奮い立たせる場合も少なくないでしょう。このように、子どもの存在自体が、親を育てる場面は少なくないのです。

不完全な親子と家庭の働き

学童期にもなれば、子どもは親との関わりだけでなく、友人や教師といったさまざまな人々との関わりの中で活動し、徐々に、自由な意志をもった一人の人間として成長していきます。その過程では、どんなに愛情に支えられた親子であっても、別人格として衝突

する場面が生じます。とすれば、充実した家庭生活は、親子や家族間の衝突のない生活ではなく、むしろそのつどの衝突を乗り越え、不和と和解を繰り返しながら、親子共に成長し合える生活だと言うべきでしょう。

不完全な存在が不完全な存在を育てる、それが子育てというものです。家庭とはそうした不完全な親子が、時に衝突しながらも、人生を通して共に成長することのできる場所なのでしょう。親と子という奇跡的な出会いから生まれる家庭生活が、双方を人間として成長させる力をもっていることを見逃すべきではありません。

しかも、そうした関係が世代を通して繰り返されてきたことも重要です。冒頭で述べたように、誰もが人の子です。私たちが不完全であるのは自分の親も、その前の世代も同じです。その中で、自分の親が、自分を育てる際に、愛情を注いでくれただけではなく、親となった自分と同じ経験や苦労を重ねてきたことにも思い至れば、親のありがたさが一層身にしみてくると言うべきでしょう。他界した親に対して年ごとに追慕の想いが増してくるのはそのために違いありません。

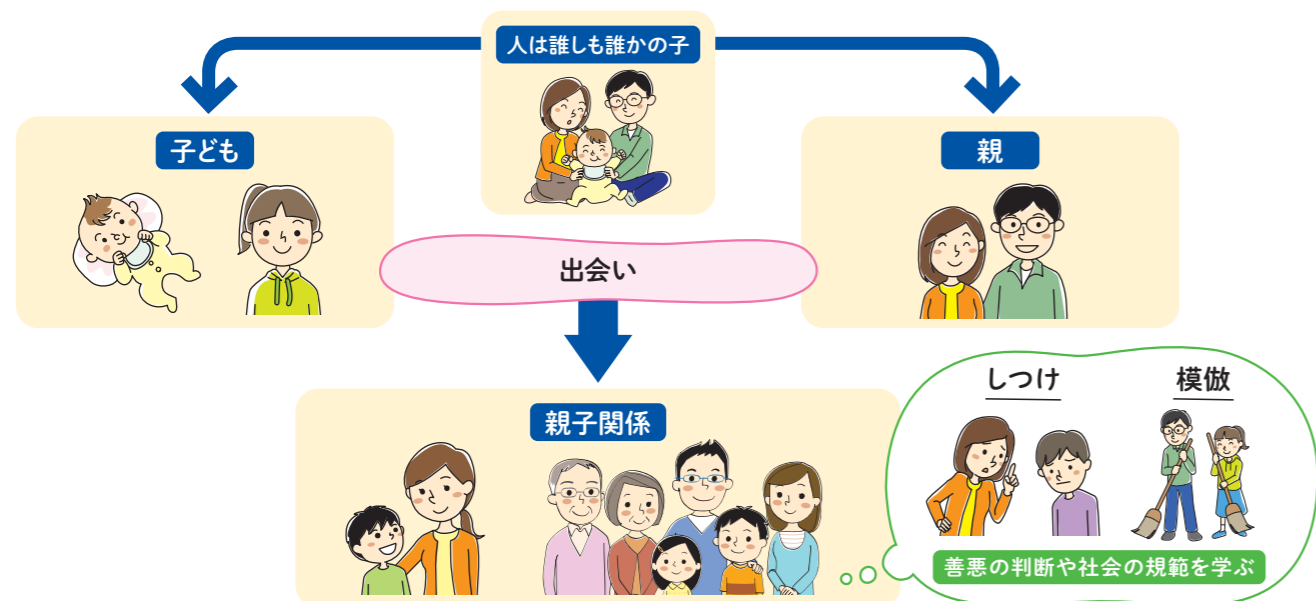


図1：出会いとしての親子関係

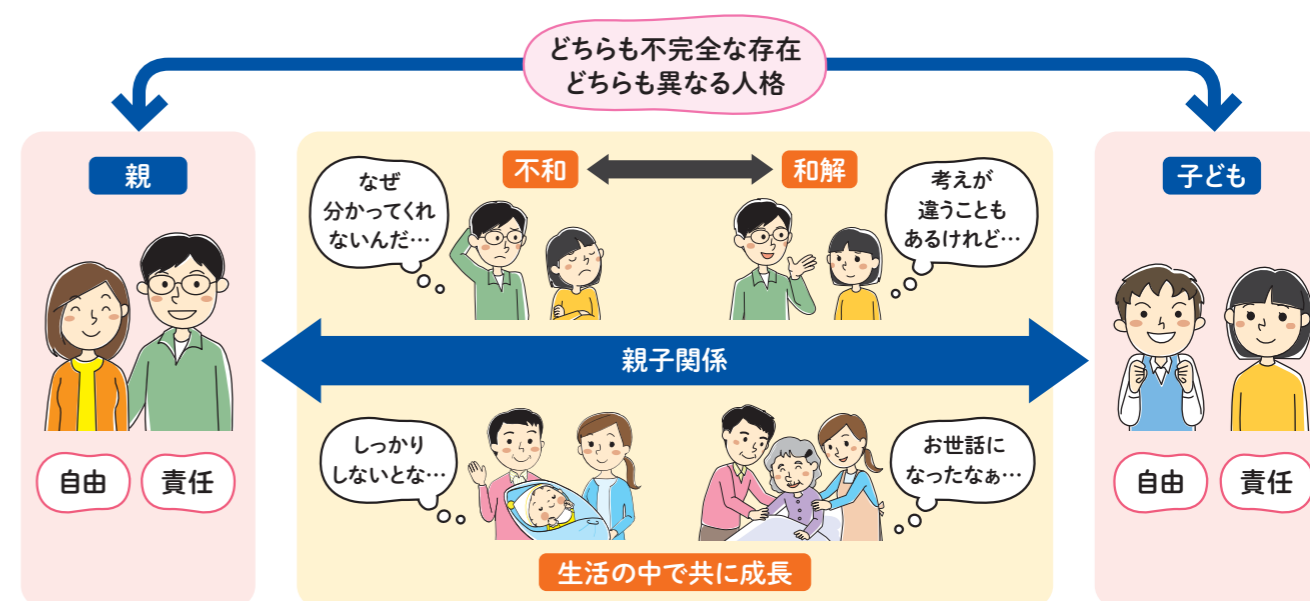


図2：共に成長する親子

法やきまりを守ることの 大切さを考える授業

兵庫県芦屋市立岩園小学校教諭 納 由理



教材名 「先着 100 名様」(「小学道徳 生きる力 6」 日本文教出版)

内容項目 C「規則の尊重」

主題名 法やきまりを守る

ねらい 法やきまりには、叱責や周りの視線が気になるから守るのではなく、自分が守りたいからという守り方があり、それがみんなで安心かつ安全な社会をつくることを理解し、自分勝手な見方でなく、よりよい社会で生きていくために進んで守ろうとする意欲を育てる。

教材あらすじ 先着 100 名がもらえるサイン入りカードを手に入れたくて、美術館に行く道を急ごうとする悠太。兄に交通規則を守るように言われ、立腹しながらも従った結果、先着 100 名に入れなかったため、サイン入りカードを手に入れられず、兄に食ってかかる話である。

① はじめに

本学習で取り上げる内容項目 C「規則の尊重(第 5 学年及び第 6 学年)」は、学習指導要領で「法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切に、義務を果たすこと。」と示されています。社会生活上、必要なきまりや国のきまりである法律などを進んで守り従うという義務を果たすことは、自他の権利を守り、よりよい社会生活を送るうえで大変重要です。

子どもたちにとって身近な社会の一つが学校です。しかし、子どもたちは、学校のきまりを守ることをなんとなく理解しながらも、きまりを守りたくない態度をとったり、誰も見ていないからという理由で守らなかったりすることがあります。学校では、子どもたちにきまりを守るように指導はしていますが、きまりを守る意味について考えさせる機会は、あまりないように思います。

そこで、本学習をきっかけに法やきまりの意義、意味について考えることを通して、法やきまりは、社会の一人ひとりが安心・安全に過ごすためにあることを理解し、自分もそのような社会をつくる一員であるとともに、自他の権利を尊重し、義務を果たすことの

自覚につなげたいと考えています。

② 教材と授業のねらい

交通ルールを破ろうとしてまで、先着 100 名に入って作者のサイン入りカードが欲しい悠太は、子どもたちにとって自分と重ねやすい存在だと思います。6 年生くらいになれば、「見つからなかったら少々のことくらい。」「誰にも迷惑をかけなかったら、大丈夫。」とたかをくくり、きまりを守らなかった経験をもつ子どももいるでしょう。

この教材は、悠太の「どうしてもカードが欲しい。」という気持ちを子どもたちも理解できるからこそ、誰もがもつ人間の弱さに共感させ、自分勝手な見方でなく、法やきまりを守ろうとする意欲を育てるよさがあると言えます。

そこで本学習では、悠太だけでなく兄の立場にも立ちながら、互いの思いや考えを整理し、本当は分かっているけれど、つい自分の弱さに負けてしまいそのような人間の弱さを理解すると同時に、私たちが法やきまりを守ることで、安心かつ安全な社会をつくることにつながり、そういった社会をつくる義務があることを確認したいと思います。私たちが共に生きる社会をつくっていく一員であることを気づく授業になればと思います、実践しました。

③ 授業実践

(1) 授業実践

いつも授業の入り口は子どもの興味を引き出せるかどうかを意識しています。特に道徳は、身近ではない教材が多く、自分とは関係のない、どこか遠くの世界の話であるように子どもは認識しがちです。

「自分だったらどうだろう。」「なぜ、この主人公はこんな行動をとったのだろう。」「主人公の行動を支えたものは何だろう。」と授業の終盤まで子どもたちの興味が続くと、授業に考える必然性が生まれます。

今回は、学校のきまりに対してふだんから「こん

なきまりなんて。」と面倒に思うことについて事前にアンケートをとり、教材をより身近なこととして意識させることにしました。アンケートを行うよさは、2 点挙げられます。一つは、教師が事前に子どもの思っていることを知ったうえで授業に臨めます。もう一つは、特に「人と違ったらどうしよう。」とためらうこともある高学年では子どもが自分と同じ意見があることに安心したり、違う意見に対して興味をもったりするきっかけになることです。

今回、アンケート結果を見ると、ふだんからきまりがある理由を説明はしているので、子どもたちなりに理解はしているものの、どこかできまりを守ることが面倒だと思っていることを再確認できました。

(2) 展開

子どもたちは、面倒だと思いつつも学校のきまりを守ろうとしています。しかし、その理由は「決められているから守る」だったり、「守らないと叱られるから守る」だったり、どこか他律的です。そこで、今回は「きまりのもつ意味」について考えることをめあてにしました。

「きまりを守らないといけないことを分かっているながらも、目的達成のためなら破っても仕方ない。」という考えの悠太に、子どもたちは自分と重なるところがあるため共感できます。一方で「どんなことがあっても、きまりは守らないといけない。」という兄の考えも頭では分かっています。そこで、両者の立場に分かれてそれぞれの思いを発表しました。

悠太役 「とにかく早く行きたい。」「このままでは先着 100 名に入れたい。」「(そのためには) 交通ルールはどうでもいい。」「注意する兄がうっとうしい。」

兄役 「ルールなんだから守らないといけない。」「事故につながると欲しいカードももらえない。」「急がば回れというだろう。」「けがをするから、安全に行かないといけない。」

どちらの立場からも積極的に意見が交わされました。

畿央大学大学院教授
島 恒生 先生から



規則に対して私たちは、叱られるから守る、だれかで見られているから守るといった、他律的で社会律的な守り方が少なくありません。自分の中に規則についての多面的・多角的な考え方をしっかりもち、それに従って判断し行動するという自律的な態度を身に付けることはとても大切です。

「規則の尊重」は、C の視点であることと発達段階を考えることが重要です。納先生は「みんなで」という考え方で、高学年ですから権利と義務も大事にされています。私たちには誰もが安心、安全に生きていく権利があります。ただ、この権利は、自分さえよければという考えでは実現できません。そこで、義務という一定の制限や拘束をみんなに課しているのです。例えば、みんなが道を安全に渡れるよう、交通ルールを守るという義務を果たすことが求められているのです。

このように役割を分けることによって、子どもたちは、どちらの立場も理解できることに気づきます。同時に、これまで自分の都合に合わせてきまりを守るかどうかを判断していたこと、自分の心の中に弱さと強さの両方があることにも改めて気づきます。その弱さは自分のご都合主義から生まれるものであり、状況が変われば主張も変わることも確認します。さらに、規則を守らないといけないことを分かっているのに、兄に守るように厳しく言われると、いらいらした気持ちが募ることも体感することで、その後の隼人がカードを手に入れたときの場面へより効果的につながります。

信号無視をしてサイン入りカードを手に入れた隼人に対して、悠太役は次のように思いを発表しました。

悠太役 「ルール違反した人が間に合ってどうして自分は手に入れられないんだ。」「一人で行けばよかった。」「ルールを守ったからこんなことになった。」「ルールを守ったら損だ。」「自分も欲しかった、うらやましい。」

子どもたちは発言することで、法やきまりを少しくらい守らなくてもいいじゃないかという気持ちが自分たちの心の中にもあるということを確認できました。

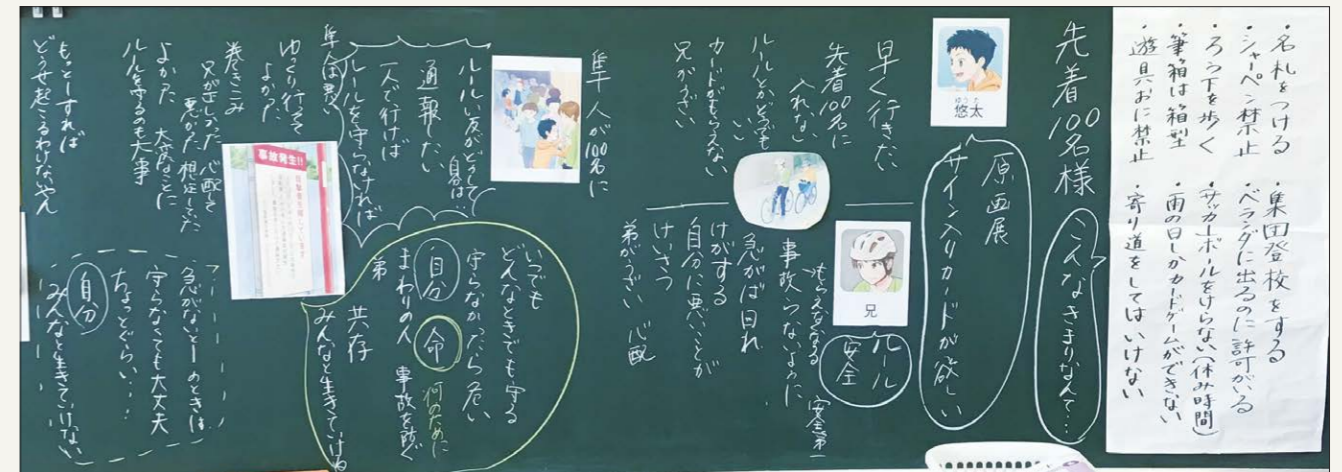
兄に腹を立て、隼人をうらやましく思い、サイン入りカードを手に入れられず、もやもやしていた悠太が帰り道にある看板を目にした場面では、次のような発表もありました。

悠太役 「事故にあわなくてよかった。」「兄が正しかった。」

教材文は「悠太は、兄の心配そうな横顔を見つめながら、美術館に来るまでの兄の行動を思い出していた。」で終わっており、悠太の心に大きな変容があったかは書かれていません。そこで、教材文にあるように兄の行った行動と一緒に振り返りました。

- ①交差点での安全確認。
- ②車が来ていなくても赤信号では止まる。
- ③お年寄りや幼い子どもを追い越すときの気遣い。

	学習活動 (◎中心発問、○基本発問、・予想される児童の反応)	◇指導上の留意点
導入	<p>1 事前アンケートで分かった、学校のきまりについて子どもたちが面倒だと思ったことを紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シャーペン禁止。 ・廊下は走らない。 ・集団登校をする。 <p>きまりのもつ意味について考えよう。</p>	<p>◇事前にアンケートをとることで、学校のきまりに対してのふだんの子どもたちの考えを知っておく。</p>
	<p>2 教材「先着 100 名様」を読んで話し合う。</p> <p>○「交通ルールを守る兄」と「その兄についていく悠太」は、それぞれどんな思いだっただろう。</p> <p>【美術館に早く着きたい悠太】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何が何でも先着 100 名に入りたいのに。 ・少しくらい守らなくて大丈夫なのに。 ・急がないと間に合わないのに。 ・いらいらする。 <p>【交通ルールを守る兄】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・悠太の思いも分かるが、ルールは守らないといけない。 ・自分の考えを分かろうとしない悠太に腹が立つ。 <p>○先着 100 名に入った隼人を見た悠太の気持ちを考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うらやましい。 ・僕だって本当は急いで美術館に行きたかった。 ・赤信号で渡ったくせに。 ・兄も隼人も許せない。 ・腹が立つけれど、僕は交通ルールを守った。 <p>◎交通ルールを守った兄の行動を思い出している悠太はどんなことを考えているでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こんな事故が起こらなくてよかった。 ・兄の言うことは正しかったかもしれない。 ・兄の言うことを聞いていたから、事故が起こらなかった。 <p>○悠太と兄のきまりに対する考え方の違いは何でしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・悠太・・・自分さえよければいい。少しくらい破っても大丈夫。 ・兄・・・規則を守ることはみんなの安心と安全につながる。規則はみんなが気持ちよく過ごすためにある。 	<p>◇「悠太役」「兄役」の立場に分かれて、それぞれの思いを発表する。</p> <p>◇悠太役と兄役に分かれることで、どちらの立場も理解できるようにする。</p> <p>◇隼人に対しての悠太の思いを整理することで、法やきまりを少しくらい守らなくてもいいのではないかという気持ちが自分の心の中にもあることを確認する。</p> <p>◇法やきまりがある理由や意義、それらを守る人としての生き方について多様な視点で考えられるように、これまでの兄の行動を振り返る。</p> <p>◇法やきまりに対する悠太と兄の考え方の違いが、自分か社会のためかの違いであることを押さえる。</p> <p>◇よりよい社会をつくっていくことにつながるという視点で話し合えるようにする。</p> <p>◇安心・安全だけでなく、自他の権利を守るためにきまりがあることを考えられるように発問をつなげる。</p>
終末	<p>3 本時の学習を振り返り、道徳ノートに記入する。</p>	<p>◇導入とつなげて「きまりのもつ意味」について振り返れるように、日常生活や学校のきまりとつなげて考えられるように声を掛ける。</p>



振り返りをした後、子どもたちに「悠太と兄のきまりに対する考え方の違いは何だろう。」「兄の行動の理由は、単にきまりは守らないといけないということだけだったのだろうか。」と問いました。

すると、悠太のきまりに対する考え方は「自分さえよければよい。」「きまりを少しくらい破っても大丈夫。」と自分本位であることに対して、「兄はきまりには周りの人たちや、ひいてはみんなと生きていくために必要だという考えがあるのでは。」という意見が出ました。「きまりを守ることはみんなの安心と安全につながる。」「きまりはみんなが気持ちよく過ごすためにある。」という意見も出て、きまりを守ることで、自分の権利だけでなく、他者の権利も守り、それがよりよい社会をつくることにつながるという視点で話し合うこともできました。

(3) 終末

最後は授業のめあてについて振り返り、次のような意見が出ました。

- ・自分がルールを守ることで、自分だけでなく人の安心・安全や権利を守ってお互いに気持ちよく過ごせます。
- ・ルールはなくてもいいと初めは思っていたけれど、やっぱりなかったら不安です。自分もほかの人も気持ちよく過ごしたいです。

畿央大学大学院教授
島 恒生 先生から



授業では悠太役と兄役に分かれ、議論をさせています。「どうせ、ルールを守りなさいということだろう。」と思って授業に臨んでいる子どもたちは少なくありません。これに対して、悠太役にはきまりなんていらないと自分たちが共感できる主張を、兄役からはきまりの大切さの主張をさせます。こうすることで、なんとなくあいまいであったきまりの大切さを子どもたちははっきりと分かってきます。

口頭でめあてを伝えたとのことですが、納先生がおっしゃるように板書に明示し、最初の考えを言わせておきます (before)。そして、両者による議論の後でめあてに戻り、みんなで考えます (after)。そうすることで方法論に流れないだけでなく、after が子どもたちの手柄となり、教材で終わることも防げます。教師にとっても、before と after を考えることで、ねらいが明確になります。

- ・ルールが何のためにつくられているのか改めて考えさせられました。学校のきまりで不満に思っているものはたくさんあるけれど、それは誰かが困らないようにしたり、危なくないようにしたりして、みんなが使いやすいようにあるのだと思いました。
- ・自分の権利を守るにはきまりがいります。それは集団で生活していくためです。

④ 終わりに

Cの内容項目であるので、社会の問題は自分の問題であるということに軸を置いて授業をしました。

しかし、この教材を授業するにあたって、気がかりなことがありました。きまりを守るということを意識したばかりに、「きまりを守ると損をする。」という考えに陥ってしまわないか、また、「もっと家を早く出れば、交通ルールを守りながらも先着 100 名に入れたのに。」という問題解決になってしまわないかということでした。特に、後者は日常生活では大切な考えかもしれません。日常でさまざまな経験をしている高学年の授業では、そのような方法論に流されてしまいがちです。実際、今回もそういった方法論を発表した子どもがいました。めあてを口頭では伝えましたが、黒板に書いていなかったため、考えがぶれてしまったと思いました。



こんなコト、聞いてみました!

ちょっと聞いてみたいギモンに経験をもとにお答えいただきました。
授業のヒントになったり、励みになったり。
これからの道徳の授業に生かせる何かが見つかるかもしれません。

今回のテーマ

道徳科の授業に苦手意識を感じる先生がいたら、 学校としてどんな取り組みをすればいいですか?



異学年・異年齢のチームで協働し、
授業づくりの課題を解決しましょう!

福岡県大野城市立大和小学校指導教諭 友延 倫子

大和小学校は児童数が1000人を超え、37学級ある大規模校です。本校では、かねてより道徳科の研究に取り組み、令和3年度から福岡県重点課題研究の指定を受け、「教科横断的な単元構成の工夫をし、道徳科と他教科を関連させたカリキュラムの充実」についての研究を行っています。昨年度は、その研究成果について発表会を行いました。私は昨年度赴任して以来、研究主任を務めていますが、本校の教員が熱心に研究に取り組む姿勢に学ぶことが多くありました。その一方で、道徳科の授業に苦手意識をもっている教員もいて、道徳科の授業のさらなる充実が必要だと感じました。

そこで、今年度は教員それぞれの道徳科の授業づくりに対する課題を基に、異学年・異年齢のチームをつくり、チームで協働して課題解決をしながら授業づくりを行うようにしました。教員数が多いため、1チーム4、5人のチームを8つづくり、研究を進めました。

各チームの課題

- ①子どもが自分の経験を基に語り、対話が生まれる発問の工夫
- ②子どもが主体となって話す対話を生み出す発問の工夫
- ③導入のアプローチ(課題意識のたせ方)の工夫
- ④納得解につながる対話が生まれる発問の工夫
- ⑤自分ごととして考える手立て(発問、グループトーク)
- ⑥価値に迫ることができる役割演技や動作化
- ⑦対話が生まれるようなさまざまな手立ての工夫

各チームの課題を解決するために、チームリーダーを中心に授業づくりを行っています。あるチームでは学年が異なることを生かし、同じ教材を活用して発達段階での違いを明らかにする授業づくりをしたり、また別のチームでは、子どもの思考を視覚化する手立てを工夫して、チームで協働的に教材研究を行ったりしました。チームにはさまざまな年齢層の教員がいるため、ベテラン教員は道徳科に限らず、教材分析の仕方や子どもの意見の取り上げ方などを教えたり、若手教員はICTの使い方を教えたりと、それぞれの役割を果たしながら1つの授業をつくり上げています。大規模校では教員が多く、どうしても同学年との関わりが密になり、他学年の教員との関わりが少なくなりがちです。異学年・異年齢のチームをつくることで、他学年の教員との関わりもでき、若手教員にとっては学びの場となっていることも、研究のメリットです。



年度当初は、「自分たちでどう進めるのか。」「授業の流し方がチームで違ってよいか。」「負担が大きいのではないか。」など、チームごとに任された研究に戸惑う声もありました。しかし研究が進むにつれ、「チームの課題があることで、自分の苦手を克服することができた。」「自由に授業づくりをすることができた。」など、成果についても聞くことができました。大和の教員の高い意識と、少しでも子どもたちにとってよい授業をしたいという思いが、今年度の校内研究を活気あるものにしてくれました。

異学年・異年齢のチームでの研究により、さまざまな角度から課題を解決する授業づくりを行うことができました。学ぶ姿勢をもち続ける大和の教員らのすばらしさが、これからのさらなる道徳科の授業の深まりにつながることを確信しています。

地球の仲間からの メッセージ

獣医師、元大阪市天王寺動物園長
長瀬 健二郎

ハトとフラミンゴの 子育て戦略

「哺乳類」の語源は、母親の乳房から分泌される乳で子どもを育てることに由来しています。これは、ほかの脊椎動物にはない特徴で生物を分類するための名称でも用いられています。この乳は消化しやすく、栄養たっぷりです。子育てに特化した理想的なものです。そのうえ、母親の体内で作られますから、母親と赤ちゃんが接触できる状態であればいつでも確実に与えられるというとても便利なものでもあります。

驚くべきことに、哺乳類と似たような特徴をもつ鳥がいるのです。鳥がおっぱいで子育てするのかということにみなさんも疑問をもたれるでしょうが、乳でヒナを育てる鳥がいます。しかも父親も乳を与えるという哺乳類もうらやむ鳥が、ハトとフラミンゴです。

フラミンゴはともかく、ハトは身近な鳥ですが、どなたもハトがヒナに乳房から出る乳を与えているところを見たことはないでしょう。ハトとフラミンゴには



ヒナに餌を与える親鳥(フラミンゴ)

乳を分泌する乳房はありません。乳房の代わりになるものが、食道の一部が変化して袋状になった嚙嚢(そのう)です。嚙嚢は食べたものを一時的に蓄え、体温と唾液によって消化しやすいように柔らかくする働きがあります。また、ここにいったん蓄えられ、少しずつ均等に胃へ送り出し、消化を効率よくする働きもあります。ヒナが卵からふ化する時期に、親たちの嚙嚢の内壁を作る細胞の中に哺乳類の乳と同じような成分が蓄えられます。そして、成分がいっぱいになると、細胞壁が壊れて中に蓄えられていた乳が流れ出し、父親も母親も吐き戻した乳を口移しでヒナに与えます。このように哺乳類とは乳が分泌される過程や蓄えられる場所が違いますし、成分的にも糖質がまったく含まれていないなどの違いがありますが、脂肪やたんぱく質に関しては人間のそれよりも多い、栄養豊かなものです。そして、ヒナが卵からふ化した直後はこの乳だけを与えますが、ヒナの成長に伴って次第に親が食べ半消化された餌の比率が上がり、最後は親が食べたものだけに替わって離乳となります。普通の鳥はヒナが成長するにはたくさんの動物性たんぱく質が必要なので、繁殖期は幼虫がたくさん発生する春から夏に限られることが多いのですが、ハトはこの縛りがないのでほぼ年中繁殖が可能なのです。とても有効な繁殖戦略ですね。



ヒナに餌を与える親鳥(ハト) 提供: Biosphoto / アフロ

改訂版 道徳にチャレンジ

学校の教育活動全体を通して行う道徳教育やその要となる道徳科の目標や内容、指導計画・指導方法をキャラクターがガイドし、解説します。また、演習が設定されているので、実践的な指導力が身につきます。

道徳教育を知りたい先生、校内研修や年次研修などでご活用いただけます！



石黒 真愁子 著

1,900円+税

B5判 160ページ

主な内容

●道徳の理論

- ・主体的・対話的で深い学びとは？
- ・教科化の背景と経緯は？
- ・道徳性って何だろう？
- ・道徳教育っていつ、どこで行うの？
- ・道徳教育の内容って何だろう？

●道徳の指導方法

- ・道徳教育の全体計画って？
- ・学習指導計画案作成のポイントは？
- ・いじめ防止と道徳の教科化とは？
- ・道徳科の評価って？
- ・令和の日本型学校教育における道徳教育って？

書籍のご購入をご希望の方は、全国の書店、または amazon 等のオンライン書店にてお買い求めください。

どうとくのひろば

読者アンケートにご協力ください！



よりよい広報資料をお届けするため、先生のご感想、ご意見を左の二次元コードからぜひお聞かせください！

どうとくのひろば No. 39

日文教育資料 [道徳]
令和7年(2025年)1月31日発行

編集・発行人 佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL: 06-6692-1261
FAX: 06-6606-5171
表紙写真提供 アマナイメーجز
本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33744

日本文教出版株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL: 06-6692-1261 FAX: 06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16
TEL: 03-3389-4611 FAX: 03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14
TEL: 092-531-7696 FAX: 092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18-7F-B
TEL: 052-979-7260 FAX: 052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1
TEL: 011-764-1201 FAX: 011-764-0690